

Essay

Sapiarc.com

2009年8月15日(2009-14)

8月15日 雑感

8月15日が来た。70歳以上の日本人ならば、誰でも毎年この日を特別な思いで迎えてきたことと思う。64年前のこの日、昭和20年(1945年)8月15日に太平洋戦争は終わった。暑い日だったと思う。

64年前の8月15日に、私はどうしていたか？ 私には僅かな記憶はあるが、それは明確なものではない。私は、当時田舎に疎開していた。その田舎は、私の父方の祖母の生まれ故郷で、私の家系のルーツに当たるところである(祖父は他家から婿入りした人で、田隅という姓は祖母のファミリーネーム)。兵庫県姫路市から25kmぐらい北に入ったところで、当時は純農村だった。播州平野が尽き、そこから中国山脈の裾が始まるところに、およそ50軒から100軒の人家から成る集落があった。これは今でも余り変わっていないようだ。

昭和20年6月の半ばに、私は、祖父母、母、次兄とともに、兵庫県西宮市からこの地に疎開した。父と長兄の2人は、大阪府茨木市にあった母の実家に寄寓して、父は大阪市内の勤務先に、長兄は兵庫県芦屋市の(旧制)中学に通っていた。つまり、ひとつの家族が、昭21年4月までの10箇月ばかりの間、2箇所に離れて暮らしていたわけだ。

昭和20年8月、私は8歳で、小学校の3年生だった。8月は夏休みのはずだが、当時は全てが通常とは違っていたので、本当に夏休みがあったのかどうか、私にはハッ

キリした記憶はない。小学校の校舎の一部は陸軍に接収されており、何十人かの兵士が寝泊りしていたようだ。その兵士たちが何をしていたのか、私は憶えていない。

8月15日の正午に重大放送があることは、そんな片田舎でも分かっていた。それが天皇の放送であるということが分かっていたかどうか、つまり、後になって「玉音放送」と言われるものだということが一般に知れ渡っていたかどうか、私には分からない。

ともかく、私の家では、ラジオでその放送を聞いて、祖父母と母はどうやら中身が分かったようだった。どうやらという曖昧な表現になるのは、雑音の多い放送だったので、聞きにくかったこともあったが、あの難解な文語で書かれた終戦勅語を聴くだけで理解することは、戦前の教育を受けた人にとっても容易なことではなかったはずだからだ。もちろん私には何も分からなかった。放送を聴き終わってから、母が私に何か言ったかどうかとも記憶にない。

私が比較的はつきりと憶えていることは、放送のあとで(あるいは翌日だったかもしれない)、同じ集落内に自宅のあった小学校の先生(50歳を過ぎたぐらいの人で、教頭ではなかったかと思う)が、私たちが住んでいた家の近くの道を通りかかって、たまたま戸外に居た母と私に向かって、「どうですか?!無様な負け方は!」という意味のことを土地の言葉で言ったことである。言論統制が極端に厳しかった当時、そんな

ことは玉音放送以前にはとても言えなかったはずだ。放送を聴いたその先生は、それまで言わずに我慢に我慢を重ねていたことを吐き出さずにはいられなかったのだろう。私は今になってそう思っている。

昭和20年8月15日は、日本にとってどん底の日だった。それから64年の時を経た今年の8月15日、日本の状況はパッとしたものではない。百年に一度？の不況は続いており、夏ものの売行きははかばかしくないようだ。西日本で豪雨による被害が相次ぎ、8月11日には駿河湾での地震で東名高速道が崩れた。月末に予定されている衆議院議員選挙に向けての政党のマニフェストには問題が多い。

今どういう希望があり得るのだろうか？ それを問う前に、64年前の8月15日にどんな希望があったかを振り返ってみることが必要だろう。当時大多数の日本人は、戦争が終わったことでホッとした。しかし、将来に対する確かな希望を持てた人は殆どいなかったはずだ。それに比べれば、今の状況は遥かに良いのではないだろうか。その良い状況が今後どうなっていくか予断を許さないところに問題がある。私は、今後の成り行きをしっかりと見守りたいと思っている。（おわり）